

「遠友夜学校」校名の由来と「独立教会」

三島徳三

新渡戸夫妻はなぜ遠友夜学校を創ったか

新渡戸稲造夫妻は札幌農学校教授時代の一八九六年(明治二七年)一月、遠友夜学校(正式校名は札幌遠友夜学校)を創設した。所在地は札幌市街を南北に流れる豊平川の川縁近くで、周辺には貧民の家屋が多く、一種のスラム街の様相を呈していた。義務教育制はすでに明治五年から導入されていたが、貧民の家庭では子供は貴重な労働力であり、小中学校に通うのは稀であった。こうした昼間学校に行けない子供達のための教育施設をつくることは、稲造の年来の願望であった。このことは、一八八五年(明治一八年)十一月、稲造が米国のジョンズ・ホプキンス大学に留学中に親友・宮部金吾に送った書簡(邦訳は『新渡戸稲造全集』第二十二巻、教文館、に収録)にも書かれている。書簡の中で稲造は、札幌に三種の学校設立を行う計画を述べている。一つは老人・成人のための学校、二つは専門学校または大学の受験を希望する青年のための学校、そして三つ目が貧しい人々や労働者の子供達を対象とした夜学校の設立であった。夜学校では「日本語の初歩と、できれば英語を少し、さらに算数を教える。また女子には刺繍、裁縫、編み物、英語、国文学を教えたい」としている。そして、同じキリスト者である宮部に対して、「そうした仕事は、“神”の栄光を世に輝かしめるための大いなる一助となるのではあるまいか？」と問いかけている。

新渡戸稲造は、六年間の欧米留学を終えた一八九一年(明治二四年)二月に、米国人のメリー夫人を伴って札幌農学校に教授として赴任した。夫妻の官舎は、同校の演武場(現在の時計台)の近くにあった。周辺にはバラック建ての家が多く、貧民子弟のための学校設立に対する新渡戸夫妻の思いは増すばかりであった。そうした願望を実現に向かわせたのは、メリー夫人の実家である米国のエルキントン家から送られてきた一〇〇〇ドルの資金であった。この資金は孤児院から同家に引き取られ、家族同様の生活をしてきた女性が、長年月をかけて蓄財したお金であり、彼女の死に際し遺言でメリー夫人に送金されてきたものである。

新渡戸夫妻はこの浄財を元手に夜学校設立のための土地と民家を買上げた。隣地には、札幌基督教会(一九〇〇年から札幌独立基督教会と改称、以下、改称の前後を含めて、独立教会と呼ぶ)の日曜学校(豊平日曜学校)の施設があった。夜学校設立当時の状況については詳らかではないが、開校当初は毎週二日間、生徒の希望する学科と簡単な看護法、礼の作法、裁縫などを教え、日曜日には稲造自身による修身講話や唱歌の練習がなされたようである。講話ではしばしばリンカーン伝が取り上げられ、彼の名前をつけた倫古龍(リ

ンコリン) 会という名の高学年の生徒組織もつくられた。

新渡戸夫妻は夜学校の設立について、「天なる父の栄光を証しすることになるに違いない」と、義弟のジョセフ・エルキントン宛に書き送っている（『新渡戸稲造全集』第二十二巻、四六七頁）。しかし、夜学校の運営にあたっては、稲造はキリスト教は表面に出さず、「キリストの教えに従って行動する方が、言葉を用いるよりも、多くの人の心を捉える」（同四六四頁）と考えていた。具体的には、貧しい家庭に生まれ、アメリカ大統領になったリンカーンの博愛主義、および学問よりも実行を重視する実学主義を、遠友夜学校の二大教育方針とした。そのため稲造は自ら揮毫して次の二つの扁額をつくり、校内に掲額した。

“With malice toward none, With charity for all.”

（何人に対しても悪意をいだかず、すべての人に慈愛をもって）

「学問より実行」

*前者はリンカーンの大統領二期目の就任演説の一節である。

夜学校は稲造が直接運営に関わっていた頃にすでに七〇名ほどの生徒がいた（稲造の手紙による）が、その後生徒数が増えたこともあって、日曜を除く毎日行われるようになった。そして、一八九七年（明治三〇年）からは文部省小学校令施行規則を適用し、尋常・高等二科による毎夜二時間授業を開始した。また、日曜日はしばしば遠足など学校行事にあてられた。教師は札幌農学校の生徒が無償奉仕で担当したとされているが、実際には稲造のポケットマネーからわずかの報酬が出ていた。また、学校の近くに市電が開通した後は、往復の電車賃程度のものが支払われていたようである。しかし、生徒からは授業料はとらず、学校の維持費は新渡戸夫妻と篤志家からの寄付金によって賄っていた。

新渡戸夫妻が設立した遠友夜学校は設立の経緯からして「新渡戸学園」そのものであり、稲造は亡くなるまで校長を務め、没後はメリー夫人が跡を継いだ。夜学校の運営は、明治三〇年稲造が病気のため札幌農学校教授を辞し、札幌を離れたのちも宮部金吾や有島武郎、その他新渡戸稲造の精神を継承する農学校・北大の教員・学生および民間人たちの手によって担われ、一〇〇〇名余りの卒業生を世に出してきた。実際はその数倍のものが夜学校で学んだと言われているが、働きながらの通学のため卒業にまで至らなかった。

ともあれ、遠友夜学校は、北海道最初の社会事業として貧民子弟の教育に絶大な貢献をなした。だが、米軍による本土空襲が始まり、札幌も灯火管制におかれるようになった一九四四年（昭和一九年）、軍部の圧力もあって閉校を余儀なくされ、五〇年間の栄光の歴史に幕を下ろすことになる。

この間の歴史については、私たちが遠友夜学校創立百年を記念して発刊した『思い出の遠友夜学校』に詳しいので参照していただきたい（同書の初版は一九九五年であるが、その後絶版となり、二〇〇六年三月に北海道新聞社から新装普及版として再刊された）。とくに同書の劈頭を飾る高倉新一郎氏執筆の四五頁にわたる通史「札幌遠友夜学校」は、北大の学生および教官時代の二〇数年間、夜学校を中心的に支えてきた功労者としての貴重な

記録であり、その秀逸な文章は巻を措くあたわざるほど読者を引きつける。

校名には愛児・遠益の一字が重なっている

遠友夜学校の校名が論語の「有朋自遠方来不亦乐乎」（朋有り遠方より来たる、また楽しからずや）から由来していることについては広く知られている。新渡戸稲造が最後に遠友夜学校を訪問したのは昭和六年五月一八日のことであるが、この時も生徒や教師の前で校名が論語から付けられたことを自ら語っている。このように遠友夜学校の校名が論語の「有朋自遠方来」から来ていることは間違いのないことであるが、同時に「遠友」の「遠」には新渡戸夫妻のある思いが込められていることを忘れてはならない。その思いとは、新渡戸夫妻の待望の一子でありながら生後わずか一週間で昇天した遠益（とおます）のことである。

私の想像では、多分、「遠益」の名は、新訳聖書に出てくるトマスから付けられた。トマスは、イエス・キリストの十二弟子の一人でありながら、十字架上で死んだイエスの復活をすぐには信じられなかった懐疑的な人物として知られている。札幌農学校在学時の稲造も神の存在をなかなか信じられず、そのことが彼の精神に懐疑的な一面を刻印していった。トマス自身はイエスの復活を身をもって体験したあとは、信仰の懐疑性を克服し、東方伝道に多大な貢献をなしている。こうした事実を考えると、キリスト教のクェーカー派を知ることによって「平和の主」である神の存在を信じ、生涯、平和主義を貫いた新渡戸稲造とトマスが私にはダブって見えてくる（私事になるが、私はいろいろ悩みながら二〇歳の誕生日に聖公会の教会で洗礼を受けたが、そのときに外人司祭から付けていただいたクリスチャン・ネームもトマスである）。

遠友夜学校の校名が「遠益」の一字をとったのではないかということについては、一部の夜学校関係者からつとに指摘されていた。たとえば遠友夜学校元教師の高倉新一郎氏は前出の『思い出の遠友夜学校』の中で、「札幌に落ちつかれた翌年、遠益と名づけられた男のお子さんができましたが、間もなく亡くなりました。その上、奥さんは肥立ちが悪く、一時アメリカの実家に帰られ、先生が送って行かれました。その後、先生は子宝に恵まれなかったのです。先生の失望は大きく、遠友夜学校なども、遠益君の一字をとったのだとさえ言われています。」（「新渡戸先生と札幌」、二二七頁）と述べている。

私も「遠友」の「遠」は「遠益」への思いとダブらせたものと考え、講演などでこうした推察を述べてきた（「新渡戸稲造—その業績と現代的意義—」『札幌同窓会誌』第一三号、一九九七年）。

こうした私の推察を「確証」へと導いたのは、稲造の令孫である加藤武子さんが、二〇〇二年五月札幌で開催された「新渡戸稲造メモリアルデイ」において行ったスピーチである。この集会は、稲造が最後に遠友夜学校を訪問した五月一八日（一九三一年）近辺の土曜日に行くことになっているが、その第一回の集會に招待された武子さんは、門外不出の

稲造の日記を調べたうえで、遠友夜学校の「遠」には、私の推察とおりの「遠益」の一字が重ねあわされていたことを断言してくれたのである。

この集会ののち、武子さんから私あてに『祖父 新渡戸稲造のこと』と題する小冊子が送られてきた。これはキリスト友会日本年会が二〇〇一年十一月に行った講座での武子さんの講演を収録したものだが、その末尾に次のようなことが語られているので紹介する。

「この遠友夜学校という名称には、二つの説が伝記の中に残されておりますので、ずっと気にかかっておりました。この際確かめたく思い、一〇六年前の祖父の日記の中に、命名の真実を八二歳の孫である私がやっと見付けたのでございます。

—— 一八九六年一月十日（金曜日）

大雪、夕方夜学校に行き、夜はメリーと夜学校に何か名前をつけるべく話し合う。メリーは私たちのベビー、トーマスの名前をどこかに組み合わせることを示唆した。亡くなった愛児遠益のトウをそのままつかうのはむつかしいので、トウをエンと読ませて、遠友とするのが一番われわれの思いに叶った。」

同日の日記の後半部分には、神の存在を感じさせる新渡戸夫妻の神秘的体験がリアルに書かれている。

「夜学校から戻る途中、稲妻のようにわれに来るものあり、大いなる創主なる神の声。耳を傾けさえするなら、富めるも貧しきもひとしく神の祝福はそそがれる。そして、神のみ声はわれわれの胸に満ち、大気にもみちみちて、天にいまし給う善なる神のかぐわしい香りは、大気の中に放たれていた。わが家に帰りつくと、出産以来ずっと半病人のようになっていたメリーは、『急に勇気がよみがえり、キリストが私に歩みより、いやしの手をさしのべ給うのが感じられた』と言った。——

事の順序から言えば、夜学校からの帰りの道で稲造の神秘的体験があり、自宅で同じような体験をしたメリー夫人と、夜学校の名称について語り合い、早世した愛児「遠益」の一字を使い、「遠友」と名付けることにしたのである。夫妻とも神秘的体験をした直後だけに、夜学校の命名には神の計り知れないみ心を感じつつ行ったのであろう。

夜学校は「独立教会」信徒によって支えられていた

この日記の書かれた一八九六年（明治二九年）一月は、日記を紹介した武子さんの転記に間違いがなければ、「遠友夜学校」が開設されたとされる一八九四年（明治二七年）一月のちょうど二年前である。とすると、学校開設から二年間は夜学校にはまだ「遠友」の名称は付けられていないことになる。

創設当時の夜学校に関する公式記録は多分存在していないと思われるが、学校の様子については稲造が義弟（メリー夫人の弟）ジョセフ・エルキントンに送った手紙から窺い知ることができる。とくに一八九五年七月四日付けの手紙では「学校の向かい側に家付きの土地を買うことに決めた」ことについて、手書きの地図付きで書かれている。また、一八

九六年一月三日付け（すなわち夜学校の名称を「遠友」とすることを決めた一週間前）の手紙では、通学する子供たちが夜学校のことを「日曜学校」と呼んでいることが紹介されている。すなわち、子供たちからみれば夜学校は「豊平日曜学校」の延長であったのだ。

また、後者の手紙は一時中断され、一月十二日および一月二六日に再び書かれているが、その中では夜学校が教会信徒の篤志家によって助けられていることが詳しく書かれている。その一部を加藤武子さんによる日本語訳（『新渡戸稲造全集』第二十二巻）で紹介するところである。

「私たちは菅原夫人に手伝ってもらっています。夫君はささやかな公務員で校内に住んでいます。夫人はまさに適任です。と申しますのは、彼女は稀にみる人物なのです。彼女を何年も前から知っている私の友人が、彼女のことをクリスチャンの中のクリスチャンだと声を大にして言っています。（中略）星ハナノは、この地域担当の看護婦になる人ですが、子供たちを集めるのになかなかの役目を果たしています。彼女は掘っ建て小屋に入っていく、母親たちに幼い者たちを学校に行かせるよう説いて回ります。ときどき子供を行かせるのをいやがる母親もいます。お金を払わせたり、子供たちがキリスト教を教え込まれはしまいかと恐れるのです。学校では宗教の話はしない方が無難です。なぜなら長い目で見ますと——私たちは忍耐強く信じる心を持たねばなりません——私たちがキリストの教えに従って行動する方が、言葉を用いるよりも、多くの人の心を捉えるのです。（中略）一昨日星ハナノが病人の家を巡回しながら、ある若い娘を学校へ行かせるために願書を書かせました。この子は数マイルも離れた田舎に住んでいるので、母親は学校の中かその近くに下宿ができればと願っています。そうでなければ彼女（母親）はその子の食べるだけのお米は届けるといいます。小野夫人という人は、学校に関心をよせ、さまざまな手芸を無償で教えようと志願しています。道は多くの良き働きのために堂々と開かれ、われわれは皆、こうなっていることに感謝をしています。」（四六三～四六七頁）

『札幌独立キリスト教会百年の歩み』（一九八三年発行）下巻の巻末に創立当時の会員名簿が掲載されている。これによると「菅原夫人」とは菅原カツエ（一八六六年生まれ）のことで、独立教会には一八九〇年九月に空知教会（独立教会の分教会）から夫とともに転籍している。「星ハナノ」（生年不明）は一八九一年十月、大島正健牧師の時に独立教会に入会している。また「小野夫人」というのは、一八八九年四月、同じく大島牧師の時に教会に入会した小野ヨシ（一八六九年四月生まれ）のことではないかと思われる。新渡戸がこの手紙を書いたのは一八九六年一月だから、当時の彼女たちの年齢は二七～三〇歳で、新渡戸夫妻とは同世代である。

一八九六年一月一二日に書いた手紙には、「私たちはあるキリスト信者の青年の奉仕を確保しました。彼はこういう仕事に関心を持っていて、週のうち日・火・水・金の四日、夜学校に来て、校務を取り仕切ってくれます。」とも書いている。

これらの手紙の文面から窺われることは、開設当時の夜学校が、独立教会の有志、とくに婦人、青年の奉仕によって支えられ、運営されていたという事実である。ちなみに、私

の祖父である三島常磐は、一八五四年（安政元年）八月生まれで札幌において写真館を経営していたが、一八八九年（明治二二年）一月に大島牧師から洗礼を受け、独立教会の会員になった。そして、一九一七年（大正六年）から遠友夜学校の会計を務め、一九二二年の財団法人認可後は新渡戸稲造、宮部金吾、半澤洵（のちの遠友夜学校代表・校長）とともに理事の一翼を担い、一九二九年の新校舎建築にあたっては募金活動で中心的役割を果たした。

ついでに言えば、札幌農学校教授を辞した新渡戸稲造が、遠友夜学校の後事を託したのは親友の宮部金吾（札幌農学校教授）だが、周知のように彼は独立教会の創立当時の会員である。また、新渡戸稲造が去ったあとの夜学校は遠友会という組織によって維持・運営されていたが、稲造後の代表は次の通りで、最後の半澤洵を除き、いずれも独立教会会員である。宮部金吾（一八九八～一九〇四年遠友会代表、一八八二年独立教会入会）、大島金太郎（一九〇五～一九〇八年代表、一八八七年入会）、有島武郎（一九〇九～一九一四年代表、一九〇一年入会、のち退会）、蠣崎知二郎（一九一五～一九一九年代表、一九〇一年入会）、野中時雄（一九一九～一九二〇年代表、一九一一年入会）、小谷武治（一九二〇～一九二一年代表、一八九七年入会）、半澤洵（一九二一～一九四四年代表）。

こうした人脈をみれば、遠友夜学校が創設時から独立教会会員有志によって支えられていたことは明らかであろう。

ここで話を稲造によるジョセフ・エルキントン宛の手紙に戻すが、手紙の原文（英文）は『新渡戸稲造全集』第二十三巻に収録され、その日本語訳は第二十二巻に掲載されている。日本語訳は前述のとおり加藤武子さんによってなされているが、ひとつ気になる部分がある。それは先に引用した二つの手紙において、稲造が **the Ragged School** と書いているものを、「遠友夜学校」と訳していることである。なお、**the Ragged School** という言葉は、二つの手紙とも二回目以降の使用では **a school**、**the school** という言葉に省略されているが、これについても訳文では「遠友夜学校」という固有名詞が使われている場合が多い。前記の稲造の日記（一八九六年一月一〇日付け）から明らかのように、ジョセフ・エルキントンに手紙を出した時点では、まだ「遠友夜学校」という名称は付けられていない。読者に分かりやすいように、訳者はあえて「遠友夜学校」という固有名詞を使ったのであろうが、歴史的事実からすると誤解を招く表現である。

参考までに手元の英和辞典によると、**ragged** の邦訳は「ぼろぼろの」である。稲造は多分、「ボロ学校」といった意味合いで **the Ragged School** という言葉を用いたのではないかと想像される。実際、夜学校の旧校舎は老朽化した民家を購入したものであり、残存する写真を見ても、まさに **the Ragged School** であった。

以上で「遠友夜学校」の校名の由来と札幌独立基督教会の関わりに対する私の考察は終わる。札幌では近年、遠友夜学校の業績が見直され、「遠友学舎」と名の付いた建物（北大構内にある）や「平成遠友夜学校」「遠友塾」といった自主講座が開設されている。これら

は新渡戸稲造の事績を称えるものとして貴重なものであるが、「遠友」の言葉に込められた新渡戸夫妻の思いとこの学校を支えた人たちのことについて、ぜひ忘れないでいただきたいものである。